

近世の伏見展 ～伏見城と鳥羽伏見の戦いを中心に～

会期 2014年3月27日(木)～4月26日(土) 於 京セラ美術館

本展では、豊臣秀吉の伏見城築城を契機として伏見が城下町、港町、宿場町として栄え、明治維新の成立を決定づけた戊辰戦争の端緒となった鳥羽伏見の戦いに至るまでの伏見の近世の歴史の一端を展示しました。この冊子では、その展示内容に加え少し詳細な解説を記しております。

伏見城

【伏見城】

伏見城は、豊臣秀吉が築城した。指月^{しげつ}の丘と古城山と呼ばれる現在の伏見桃山陵のある場所にあった。伏見の町、宇治川に巨椋池^{おぐらいけ}を見下ろすことのできることから、この場所を選んだとされる。

文禄元(1592)年、指月の丘に秀吉が隠居するための屋敷を建設することを命じたことから始まった。文禄2(1593)年には隠居の館として完成した伏見城で嫡男秀頼と対面した。その後、明から来た使節を迎える場を作り、世継ぎの秀頼のために隠居の館から城へと作り替えた。そして、文禄5(1596)年に指月伏見城が完成した。その材料は木材を高知県や東北から、石材は小豆島や付近の山科大塚山などから良質なものを選んで手に入れていた。しかし、完成して間もなく、使節を迎えようとする直前に慶長伏見大地震で指月伏見城は被害を受けて倒壊する。

地震直後に、秀吉は現在の伏見桃山御陵がある山に一年で築城を命じ完成させた。この城を木幡山伏見城と言う。豊臣秀吉は、翌年の慶長3(1598)年に豪華絢爛で後世にも知られる醍醐の花見を執り行ったが、その半年後に伏見城でこの世を去った。

秀吉の死後、慶長3(1599)年に家康が伏見城へ入った。しかし、天下分け目の関ヶ原の戦いの前哨戦で秀吉が建てた木幡山伏見城は焼けてしまう。その後、徳川家康は伏見城を再建するが、二代将軍秀忠が一国一城令を發布した8年後の慶長9(1623)年、三代将軍家光の将軍宣下の後破却された。

以上が伏見城の歴史であるが、なぜ秀吉は伏見城を築城したのであろうか。その目的は2つ考えられる。まず、明使との謁見である。慶長・文禄の役と題して、朝鮮半島を主な戦場として戦争を行っている。外交的にも緊張していて、明という大国の使節に日本のトップとして強い姿を見せつけるために金箔を貼り付けた瓦を葺いたのであろうか。次に、隠居の館として建てていた城の拡張であるとされている。そのために、宇治川を巨椋池に繋げるためのバイパス工事を行い、その水面に城を映すというかつて仕えていた織田信長の居城安土城を模したと言われる。しかし、太閤秀吉が造営した伏見城天守閣がどのような姿をしていたのかわかる絵図は今のところない。徳川が作成した伏見城と考えられる絵図は「洛中洛外絵図屏風」などに描かれている。そこから読み取れることは、町が栄えていることである。政治と文化の中心、首都としての機能を一時ではあるが有していた。そして、首都機能は江戸へ移ったが、伏見は大阪から京への玄関口の機能は変わらず、その後、江戸期には水運の要

衝として大きく発展していった。このように、大阪と京都を結ぶ交通の要衝であったことから、幕末に旧幕府軍が大阪から京都に進撃しようとして、伏見は「鳥羽伏見の戦い」の舞台となったと考えられる。

本展では、秀吉の美意識が感じられる、伏見城跡や大名屋敷跡から発掘された金箔を貼られた瓦や、伏見城や淀城の石垣を切り出す採石場であったと推定されている山科区大塚山で確認されている大名家の紋が刻印された大名刻印石に関する資料、日本で最初に伏見に設けられた「銀座」で鑄造された銀錢や鑄造の際に使われた坩堝などを展示している。

〔参考文献〕

- ・加藤次郎 『伏見桃山の文化史』(1953 年)
- ・伏見城研究会編 『伏見城』 日本古城友の会 (1978 年)
- ・山本真嗣 『京・伏見歴史の旅』 山川出版社 (2003 年)
- ・堀内明博編 『伏見の古絵図』 伏見城研究会 (2010 年)

【桃山】

我々は、「安土桃山時代」「伏見桃山」の呼称を普段使っている。しかし、その起源は豊臣秀吉や徳川家康が建てた城があった頃から、後の話である。伏見城が破却され、首都が江戸に遷都した頃、伏見には沢山の失業武士がいた。彼らが、生活のために幕府から幕府直轄領となっていた伏見城跡地の使用許可を得て、モモを植えたのが始まりである。その中でも中心的役割を果たしたのが西野弥平次である。西野弥平次は、大阪の天満に「黒仁」苗を仕入れに行った。加藤次郎は、弥平次がモモを選んだ理由について、モモは植えてすぐに実が付き、果実の価値も高く経済的な面で優れていたからではないかと推測している。そして、相当数に及ぶモモの樹を古城山一帯に植樹していった。

弥平次が植樹して生み出された光景は、江戸時代中期以降になると、松尾芭蕉が西岸寺を訪問した際に、「我が衣に伏見の桃の雫せよ」と一句詠んで、その光景を称えた。さらに、現在NHK大河ドラマで脚光を浴びている黒田勘兵衛をはじめとした黒田家の記録を作成した賀原益軒が書いた地誌『京城勝覧』には「吉野の桜と対を成す」と称され、森幸安によって、「京師内外地図」、「伏見城南地図」の地誌や絵図に描かれたりするモモの名所になった。しかし、その場所は「古城山」と称され、桃山とは呼ばれていなかった。なぜなら、桃は疫病に非常に弱く、モモ自身が出す毒素によって植え続けることができない性質を持っているので、モモ畑だった場所は時代を経るにつれて、梅畑、さらに茶畑へと変遷を遂げた。その結果、幕末にはほとんどモモを見ることがなくなった。

また、『伏見鑑』によると、古城山の北側の一部は、モモ畑ではなく梅畑であったようである。そこは、梅谷と呼ばれ梅の名所でもあったようである。図は、加藤次郎が作成した当時の果樹園の分布図である。

明治になり、今のJR桃山駅を作るにあたり、市民は駅建設のお金の工面に憂慮した。そのときの西本願寺の法主であった大谷光尊が桃山に三夜荘と呼ばれる別荘を持っていたことから、費用の半分を支払ったことで無事に駅を建てることができた。その後、市民が駅の名前を光尊に決めてもらったところ、そのときにはほとんど山に生えてなかった、桃の字を冠して、「桃山」という名前をつけられた。これが、桃山という地名の発祥である。

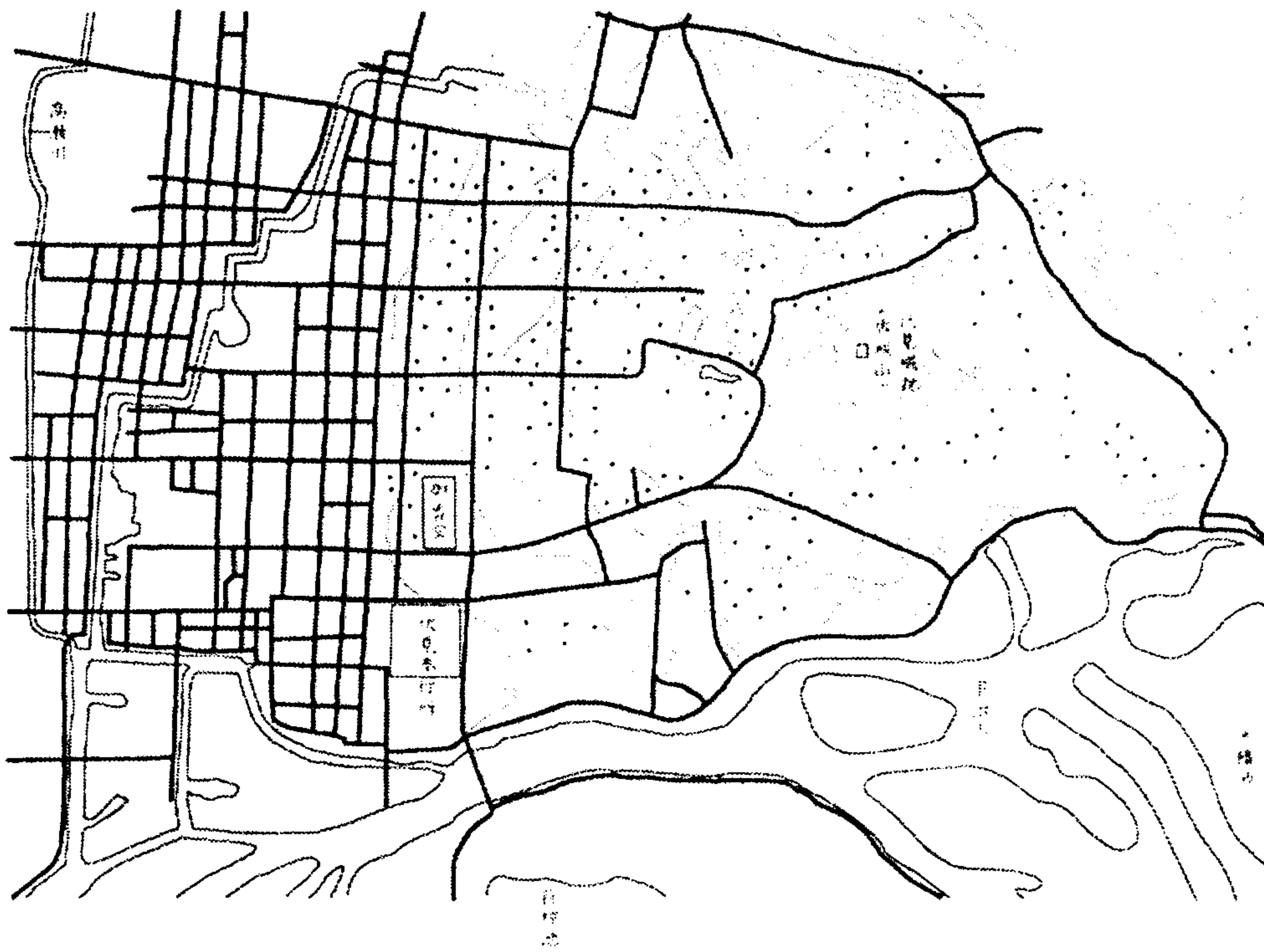


図1 江戸時代の果樹園の分布(加藤 1953 をトレース)

後に、古城山と称された山には明治天皇と皇后の陵が作られ、伏見桃山御陵と呼ばれるようになる。

〔参考文献〕

・加藤次郎『伏見桃山の文化史』

(1953 年)

・堀内明博『伏見の古地図』伏見城研究会

(2011 年)

【大塚山の大名刻印石】

伏見城の石垣石は比叡山や山科、醍醐などから集められた。『甫庵太閤記』には「文禄三年二月初比より廿五万人之着到にて醍醐、山科、比叡山、雲母坂より大石を引き出すこと夥し…」と記述されている。その一つである山科区大塚山山中に採石場跡が確認されているが、近年そこから切り出しを担当した大名家を示す刻印の彫られた石(刻印石)が相次いで確認、発見されている。「一に〇」、「一に〇二」の刻印は毛利家、「四つ目」刻印は京極家と推定されている。刻印石と同時に、石を割る際に彫る「矢穴」の残った石なども発見され、その形状などから採石場は江戸時代初期だけでなく、それ以後も何度か切り出されたことが判明した。

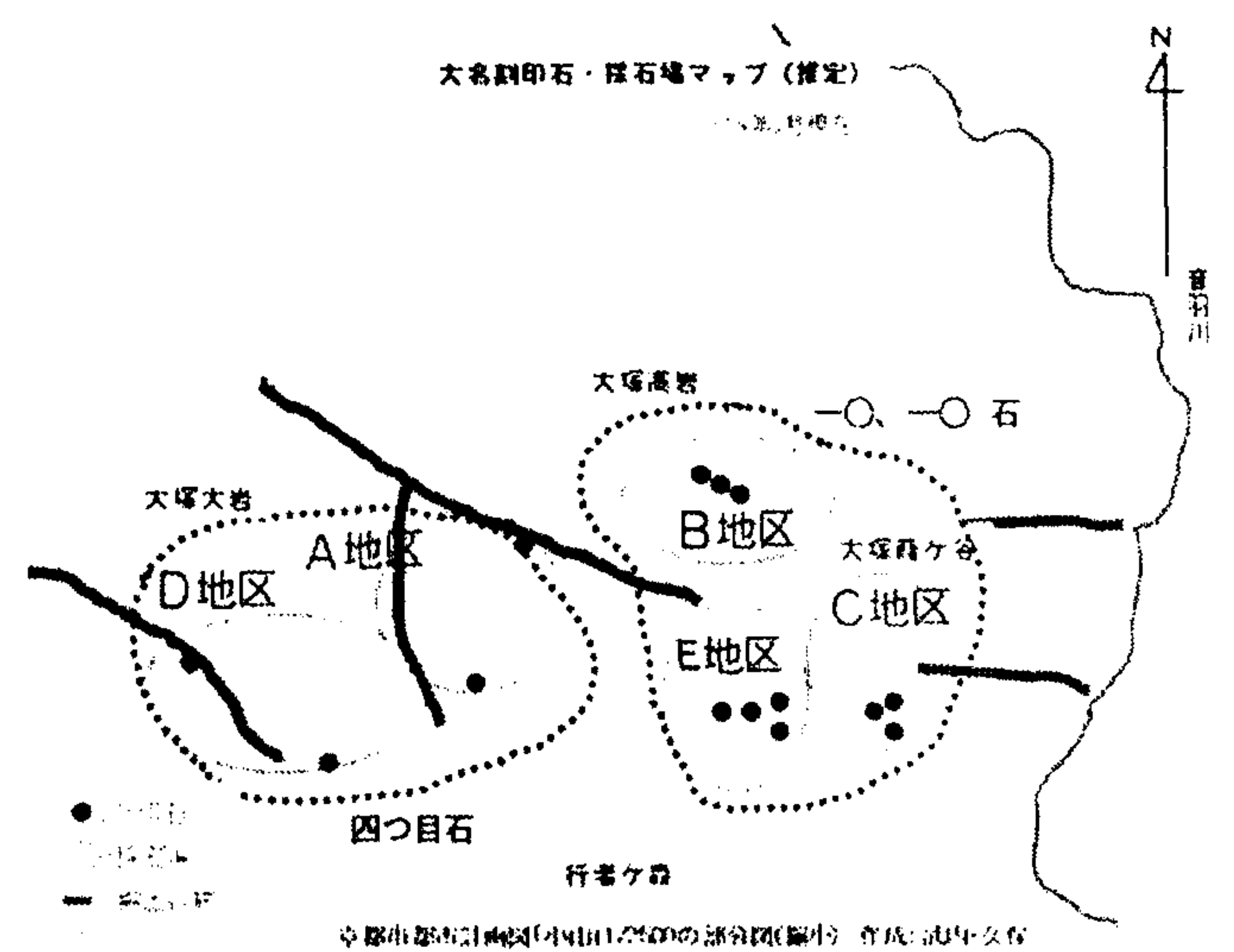


図2 山科区大塚山採石場跡地図



図3 「一に〇二」の彫られた刻印石



図4 「四つ目」の彫られた刻印石

〔参考文献〕

中川亀蔵・武内良一・久保 孝「大塚高岩の『一に〇』刻印石と採石場跡」(2013 年)

水運の要衝としての伏見

近世の伏見は淀川を利用して京都と大阪の間を結ぶ重要な水上輸送の要衝だった。大阪から淀川を経由して二十石船によって運ばれた荷物は伏見港で下され、そこから角倉了以によって開削された高瀬川や竹田街道を行く牛車、馬などによる陸上輸送によって京都に運ばれた。港には多くの問屋があり、荷物を保管する土蔵が立ち並んでいた。

また、三十石船で移動する人々も伏見港で下船し、陸路で京都や東海道を目指した。また、京都から大阪に行く人々も伏見街道や竹田街道を通して伏見京橋に行き、そこから三十石船で大阪に向かった。伏見港のあった伏見京橋界限は参勤交代の大名も含め、多くの旅人が利用する船宿や本陣があり、港で働く人々や旅行者で街は大変にぎわった。

最盛期には、伏見と京都二条を結ぶ高瀬舟が1日170艘、伏見と大阪を結ぶ三十石船が一昼夜320便、約9,000人が行き交ったと言われる。

本展で展示している『淀川兩岸一覽』は、淀川を移動する旅行者用に描かれたガイドブックで、「上り船」の部が大阪天満八軒屋を出た船が伏見に至るまでの、「下り船」の部が伏見から大阪に至るまでの、それぞれ右岸に見える光景を絵と文人の言葉なども織り交ぜて紹介したものである。

伏見港を京都側の起点とする淀川の水運はそれほどに多くの人が利用するものであったことの証であろう。

【二十石船、三十石船】

豊臣秀吉や徳川家康など将軍から許可を受けて貨物や客を運んだ過書船(かしよぶね)で、二十石船が貨物を運ぶための船、三十石船が旅客を運ぶための船であった。三十石船は28人乗りで船頭が4人乗りこみ、上り船では船頭が岸に上がって綱で引いたと言われる。大阪から伏見までは半日以上長い行程となるため、途中では食事や飲物を積んだ小舟が船に近付いて乗船客に飲食物を販売した。枚方辺りではこの売り舟が「飯くらわんか」、「酒くらわんか」と呼ばわりながら売ったことから、この売り舟を「くらわんか舟」と呼ぶようになった。壁面ケース内に掲示されている絵図は三十石船にくらわんか舟が取りついて飲食物を売っている様子を描いたものである。絵図の前に展示されている茶碗などは、このくらわんか舟が飯や汁、酒などを入れて売った茶わんや皿、徳利である。揺れる船の上でも安定するように、通常の茶碗などに比べ底を厚くし、重心が低くなるように工夫がされている。

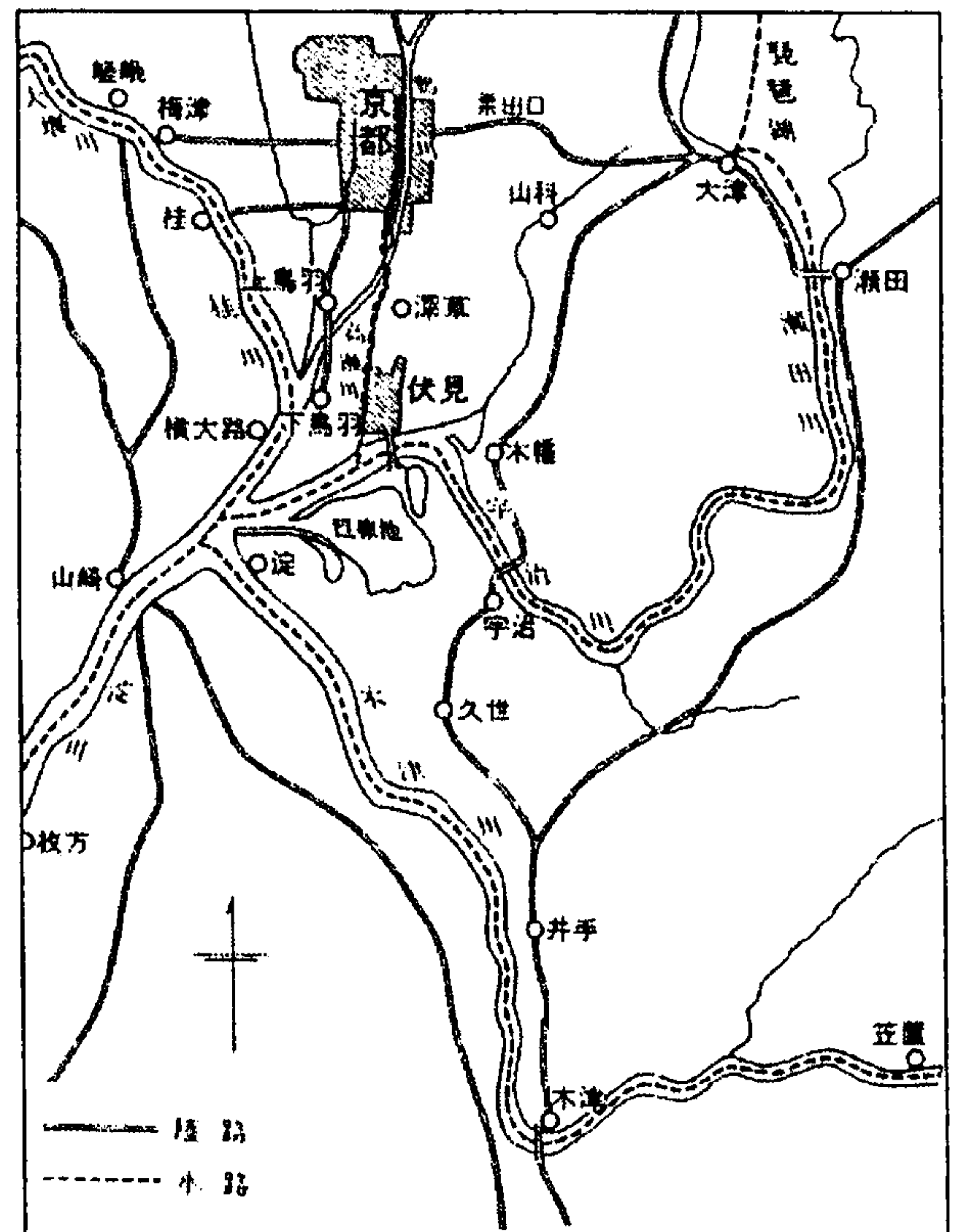


図5 京都をめぐる水運(『京都の歴史第4巻』)

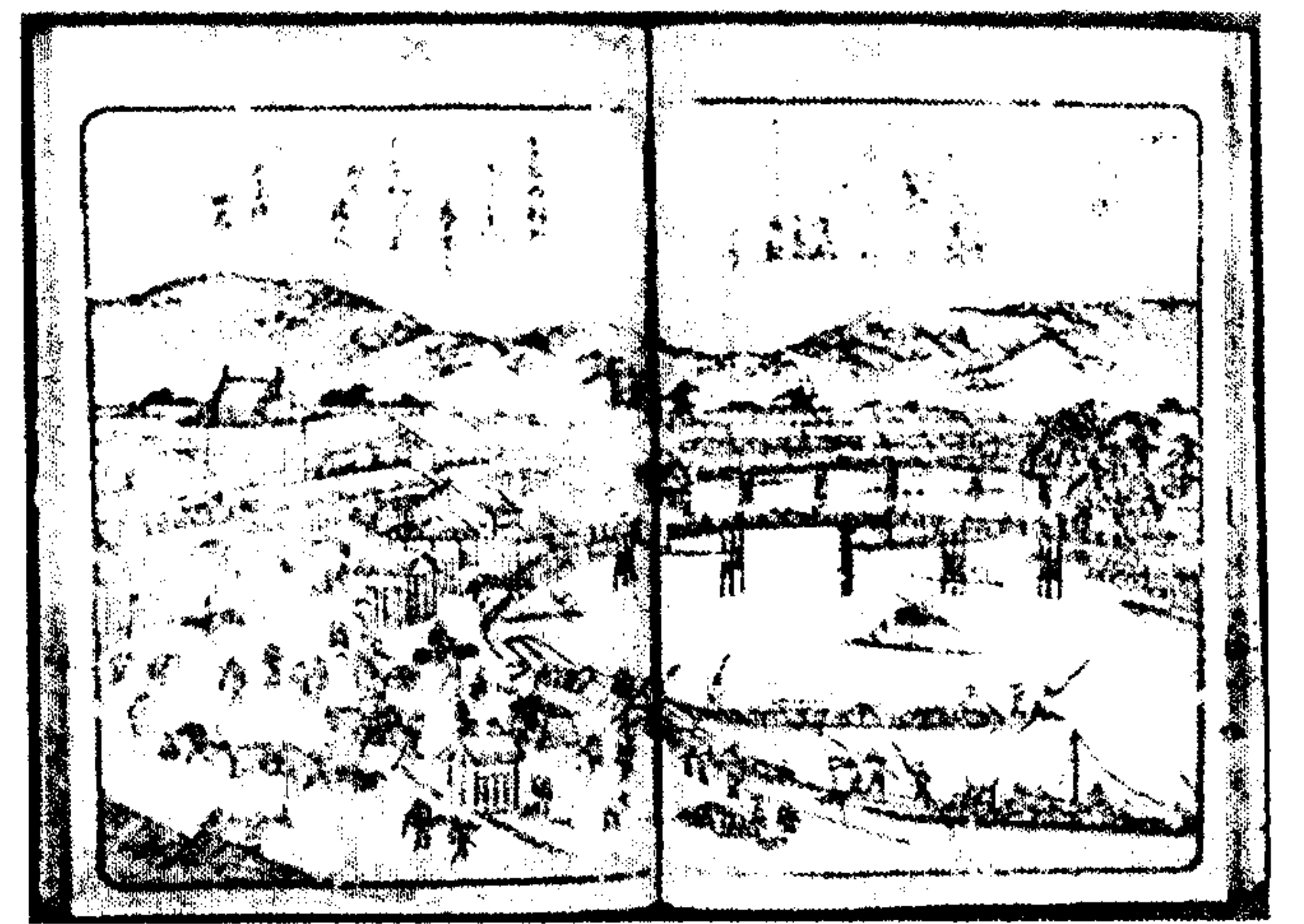


図6 伏見京橋界限の賑わい(御香宮神社蔵)

伏見の車石(くるまいし)と車道(くるまみち)

【京都の陸運を支えた車道と車石】

江戸時代の伏見は京都市内と伏見港を結ぶ交通運輸の要衝として発展し、伏見港に荷揚げされた米等の物資は牛車^{うしぐるま}で市中まで運ばれていた。当時の街道は土道だったため雨天時にはぬかるんで思うように運行できないことから、牛車専用の道路(以下、車道)には車輪の幅に合わせて2列に石が敷かれ、その上を牛車が通行するように整備された。これは当時としてはきわめて先端的な道路政策であった。車道に敷かれた石は長年の通行の中で摩耗し、轍の跡に深いU字型の窪みが残されている。こうした窪みを持った敷石は車石と呼ばれる。

伏見では、伏見港と東洞院七条を結んだ竹田街道と、下鳥羽村辺りから羅生門前を結んだ鳥羽街道に車道が設けられていたため、沿道各所で車石が発見されている。伏見における車道と車石の存在は京都の発展において伏見が果たした役割の大きさを示す証とも言えよう。

壁面ショーケース内の正行院所蔵の絵馬にはその様子が描かれている。

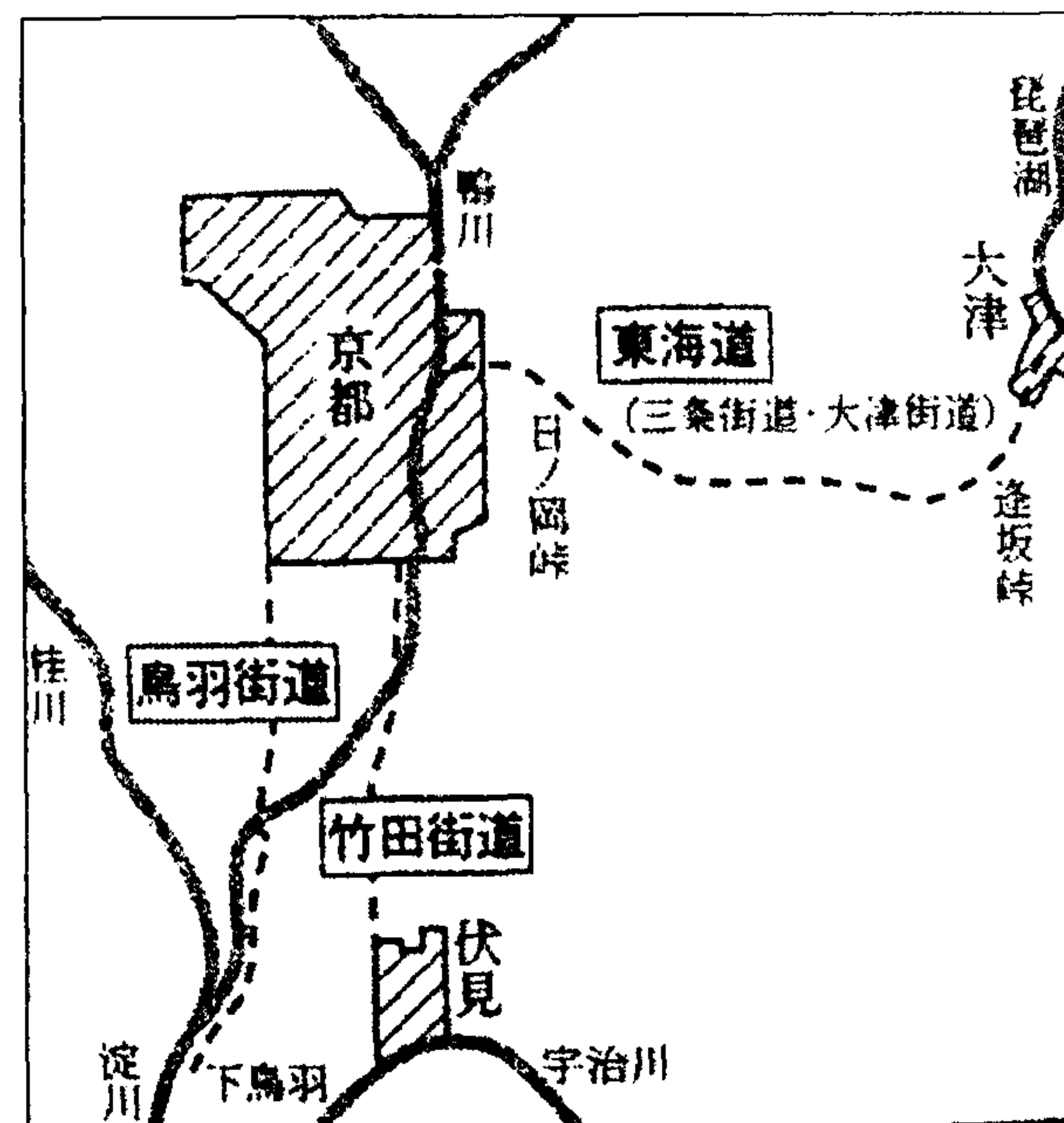


図7 車石が敷設された京都周辺の街道
(久保孝氏提供)

【車石】

竹田街道の棒鼻付近で使用されていた車石。幅約30cm、長さ約60cm、厚さ21cmから24cmが標準の大きさである。車道には江戸時代後期、こうした厚板石が牛車の車輪の幅で2列に敷かれていた。中央の凹みは牛車^{うしぐるま}の頻繁な運行により自然に擦り減ってできたもので、溝や表面には車輪のエッジによってできた細かい筋を確かめることができる。

車石の右側に展示されている拓本を貼ったレプリカを見ると、石の表面についた溝や表面の細かい筋をよりよく確かめることができる。

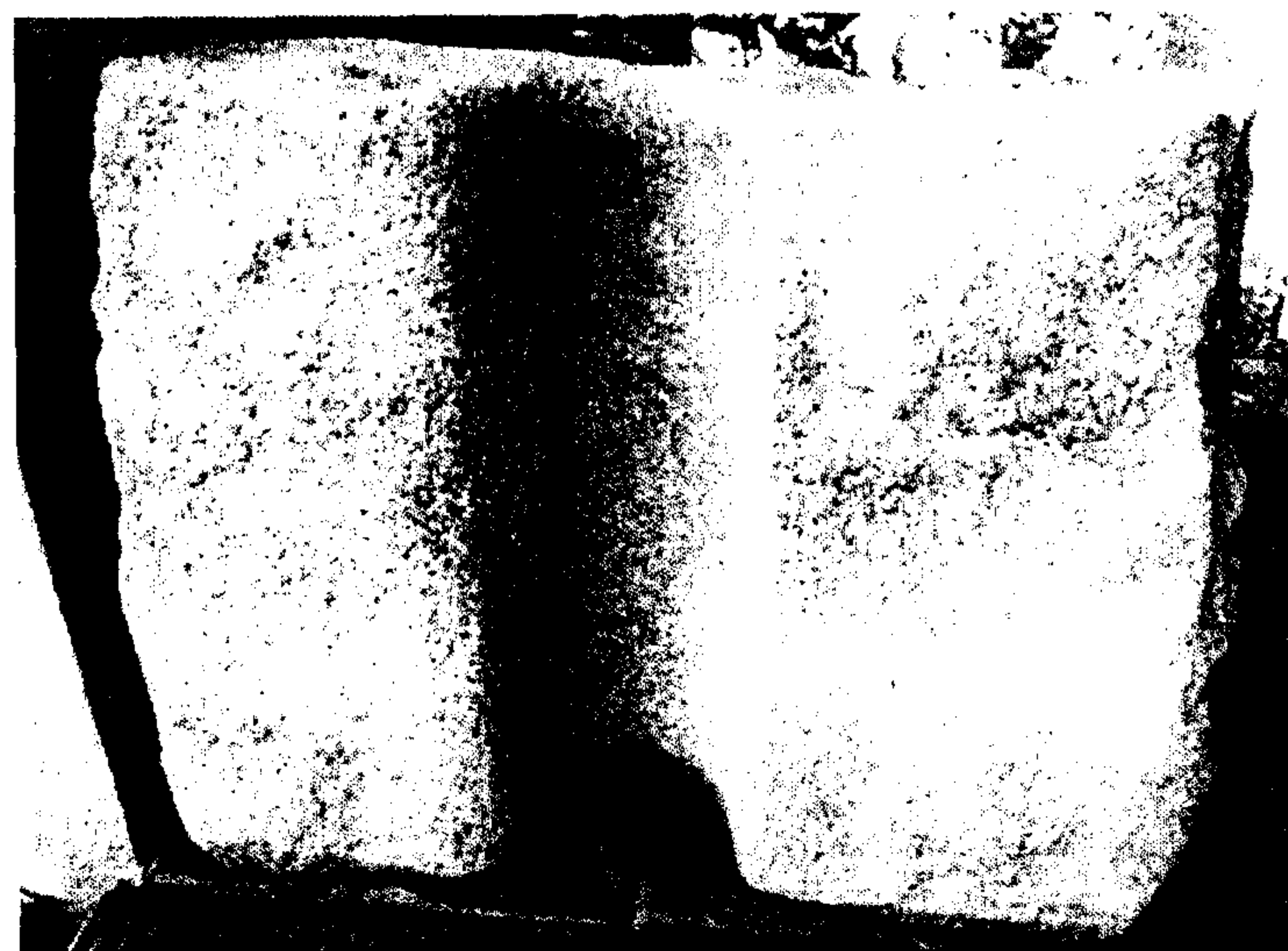


図12 竹田街道の車石(個人蔵)

【主な参考文献】

- ・車石・車道研究会編『車石の謎を追って－竹田街道・鳥羽街道の車石・車道を探る－』(2006年)
- ・車石・車道研究会編『車石・車道研究会フィールドワーク in 竹田街道 (1)』(2010年)
- ・車石・車道研究会編『車石・車道研究会フィールドワーク in 竹田街道 (2)』(2011年)
- ・車石・車道研究会編『車石・車道の謎研究－成果と課題－』(2012年)
- ・車石・車道研究会編『車石・車道研究会フィールドワーク in 鳥羽街道 (1)』(2012年)
- ・大津市歴史博物館『企画展 車石』図録(2012年)
- ・車石・車道研究会編『車石・車道研究会フィールドワーク in 鳥羽街道 (2)』(2013年)

鳥羽伏見の戦い

【鳥羽伏見の戦い】

幕末の慶応4年(1868年)1月に、現在の伏見区域を中心に行われた、薩摩藩の兵士を主力とする明治新政府軍と旧徳川幕府軍との鳥羽伏見の戦いは、最終的に明治新政府軍が旧徳川幕府軍を破って国際的に日本を統治する政府として認められることとなった戊辰戦争の緒戦として、明治維新の行方を大きく左右した重要な戦いであった。その戦いにおいて伏見は、明治政府が成立し近世から近代へと歴史が大きく変化していく重要な舞台となったとも言える。

新政府軍(官軍)は薩摩藩と土佐藩を中心とする部隊が伏見の中心部であった御香宮神社を本陣として、その南数百メートルのところにあった伏見奉行所を本陣とした旧幕府軍や新撰組と対峙した。もう一方の薩摩藩と長州藩を中心とする部隊を、大阪から淀川を上がって鳥羽街道を通過して京都に入洛しようとする旧幕府軍本隊を阻止すべく、竹田・城南宮周辺に布陣させた。戦端はまず鳥羽街道の鳥羽小枝橋付近で開かれた。新政府軍の薩摩藩が発射した大砲の砲声をきっかけに、戦闘が始まったと言われる。戦力は新政府軍5,000人に対して旧幕府軍15,000人と、数では旧幕府軍が圧倒的に優位だったが、装備した重火器の違いや作戦上の失敗などから兵力では劣った新政府軍の勝利するところとなった。その後、戦いは鳥羽伏見から、退却する旧幕府軍を追って淀、橋本方面へ戦火が広がったことから伏見の広い地域が焼失しました。

展示している錦絵はこの鳥羽伏見の戦いを描いたもので、ミニエー銃はこの戦いで新政府軍によって使用されたものである。大砲や銃などの火器の装備において新政府軍が大きく勝っていたことがこの鳥羽伏見の戦いの帰趨を決める大きな要因になったとされている。

また、壁面展示ケース内に展示された、「私学校祭文」は鳥羽伏見の戦いで新政府軍を指揮した西郷隆盛が、征韓論で下野した後に鹿児島で私学校を設立した際に行ったものである。戊辰戦争で奮闘して戦死した兵士は国のために殉じた立派な人(善士)であり、その人たちを祀って、その後に続く若い立派な子弟を育てていくことがこの学校の役割であると書かれている。

また、壁面展示ケース中央に展示された瓦版はこの戦いで伏見中心部において出火した場所を示すものである。

【ギャラリートーク開催のお知らせ】

本展を監修いただいた伏見城研究会と車石・車道研究会の方々によるギャラリートーク(展示解説会)を以下のとおり、開催いたします。ぜひ、ご参加ください。

【4月12日(土)】①11:00～11:40 (伏見城研究会 西野浩二氏(名古屋大学大学院))

②14:00～14:40 (車石・車道研究会 久保孝氏ほか)

【4月26日(土)】①11:00～11:40 (伏見城研究会 西野浩二氏(名古屋大学大学院))

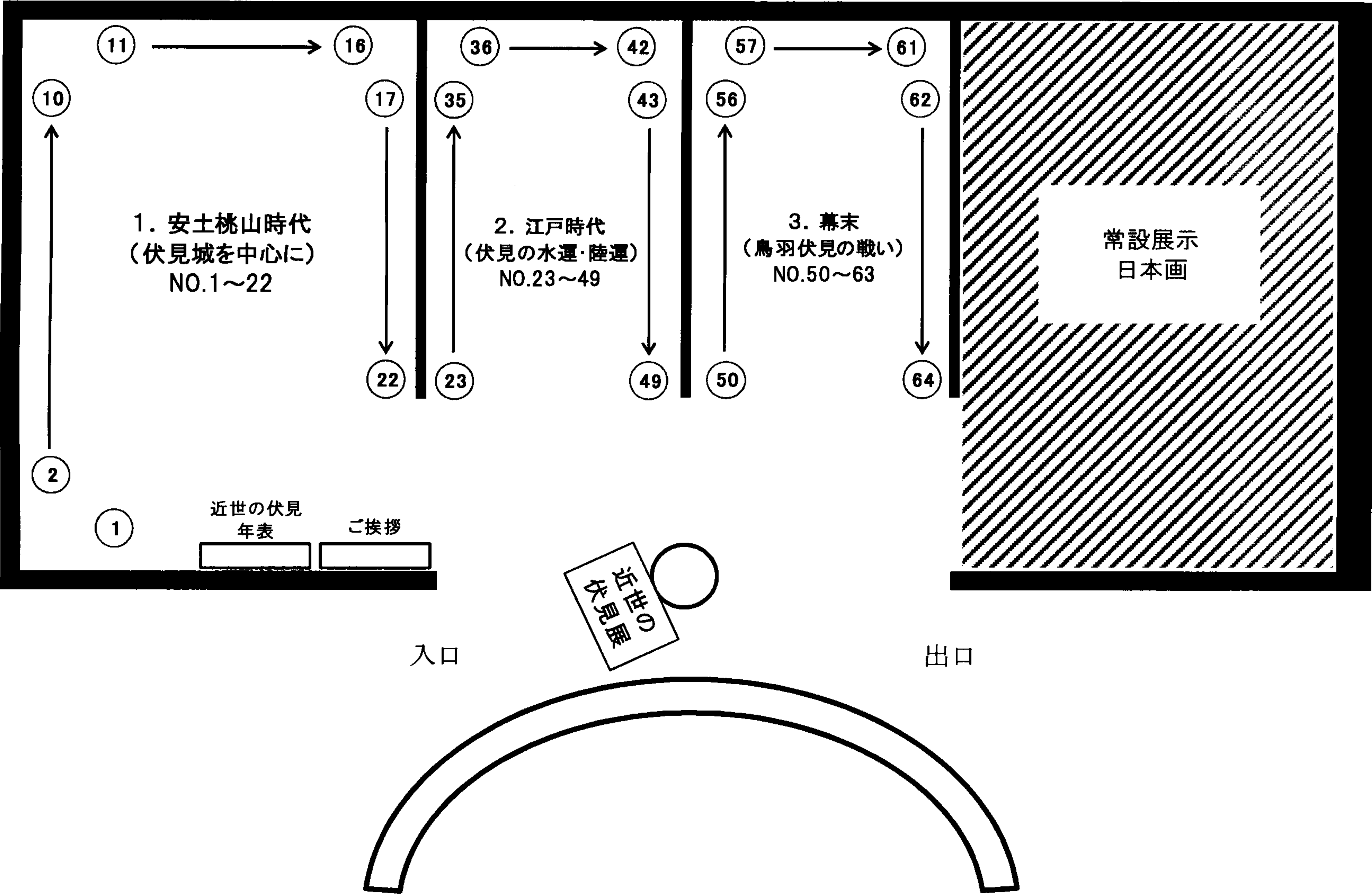
②14:00～14:40 (車石・車道研究会 久保孝氏ほか)

※展示会場左手の「伏見城金箔瓦」展示スペースにお集まりください。

流れる歴史の舞台
 近世の伏見展
 ～伏見城と鳥羽伏見の戦いを中心に～

会期：2014年3月27日（木）～4月26日（土）
 会場：京セラ本社ビル1階 京セラ美術館

会場図



展示品目録

1 三巴文金箔軒丸瓦・唐草文金箔軒平瓦	慶長年間	京都市考古資料館
2 小菊瓦	慶長年間	御香宮神社
3 輪違（わちがい）	慶長年間	御香宮神社
4 豊公伏水小幡山御在城之図（複製）	天保3年	原本は宇治市歴史資料館
5 無文金箔軒丸瓦・軒平瓦	慶長年間	京都市考古資料館
6 金箔面戸瓦	慶長年間	京都市考古資料館
7 飾り瓦	慶長年間	京都市考古資料館
8 鳥衾瓦	慶長年間	京都市考古資料館
9 伏見城の戦いで火を受けた瓦	慶長年間	御香宮神社
10 慶長五年伏見城攻図（複製）		原本は長崎県島原本光寺常盤歴史資料館
11 大塚山大名刻印石拓本		
12 鬼瓦	慶長年間	京都府立桃山高校
13 鬼瓦	慶長年間	京都府立桃山高校
14 飾り瓦	慶長年間	御香宮神社
15 飾り瓦	慶長年間	京都市考古資料館
16 亀甲紋花菱瓦	慶長年間	御香宮神社
17 伏見銀銭	慶長年間	御香宮神社
18 坩堝（るつぽ）	慶長年間	御香宮神社
19 京城勝覧「伏見」（複製）	享保6年	原本は京都府立総合資料館
20 年中行事大成「桃山遊宴之図」（複製）	文化3年	原本は早稲田大学図書館
21 皇州緒餘撰部第三紀伊郡城南京師内外地図（複製）	寛延4年	原本は国立公文書館内閣文庫

22	皇州緒餘撰部城南伏見地図(複製)	寛延4年	原本は国立公文書館内閣文庫
23	淀川両岸一覧	文久元年	御香宮神社
24	淀川両岸一覧「京橋」	文久元年	御香宮神社
25	淀川両岸一覧「高瀬川」	文久元年	御香宮神社
26	宇治川両岸一覧	万延元年	御香宮神社
27	淀川両岸一覧「淀大橋」(複製)	文久元年	原本は早稲田大学図書館
28	淀川両岸一覧「伏見船宿」(複製)	文久元年	原本は御香宮神社
29	淀川両岸一覧「淀小橋 淀姫社」(複製)	文久元年	原本は御香宮神社
30	伏見鑑	安永年間	御香宮神社
31	拾遺都名所図会「伏見中書島 弁財天」(複製)	天明7年	原本は早稲田大学図書館
32	拾遺都名所図会「御香宮」(複製)	天明7年	原本は早稲田大学図書館
33	拾遺都名所図会「伏見京橋 住吉社」(複製)	天明7年	原本は早稲田大学図書館
34	拾遺都名所図会「指月 豊後橋 大池」(複製)	天明7年	原本は早稲田大学図書館
35	都名所図会「淀 大橋 孫橋」(複製)	天明6年	原本は早稲田大学図書館
36	舟徳利(複製)	江戸時代	桃山温泉月見館
37	三十石船模型		桃山温泉月見館
38	くらわんか椀	江戸時代	桃山温泉月見館、弁財天長建寺
39	拾遺都名所図会「淀」(複製)	天明7年	原本は早稲田大学図書館
40	伏見人形「車牛」	年代不明	正行院
41	牛車模型		車石・車道研究会会員
42	竹田街道図絵馬と模写	安政2年	正行院(京都市下京区)
43	車石(「輪石」「輪形石」とも)	江戸時代後期	久保 孝氏
44	車石複製(拓本)		
45	拾遺都名所図会「竹田街道を行く牛車と車道」(複製)	天明7年	原本は日本国際文化研究センター
46	淀川両岸一覧「竹田の分れ道と牛車」(複製)	文久元年	原本は御香宮神社
47	淀川両岸一覧「柳茶屋車前を行く牛車」(複製)	文久元年	原本は御香宮神社
48	城州鳥羽海道四ツ塚町より淀小橋迄絵図(複製)	宝永7年	原本は伊藤将家
49	山城国紀伊郡第三区竹田村耕作全図	明治10年頃	伏見区竹田自治会
50	鳥羽伏見の戦い 瓦版	慶応4年	御香宮神社写真提供
51	丹波焼 通い徳利	慶応4年	京都市文化財保護課
52	旧幕府軍が放った砲弾	慶応4年	京都市文化財保護課
53	薩摩軍が使用していた洋式銃の弾	慶応4年	京都市文化財保護課
54	薩摩軍が旧幕府軍に打ち込んだ大砲の弾	慶応4年	京都市文化財保護課
55	鳥羽伏見の戦いの砲弾	慶応4年	御香宮神社
56	ミニエー銃		霊山歴史館
57	錦絵 薩州屋敷焼撃之図		霊山歴史館
58	戊辰戦争絵巻		霊山歴史館
59	鳥羽伏見の戦いの火災発生箇所を示す瓦版	慶応4年	御香宮神社
60	西郷隆盛筆 私学校祭文		個人
61	東征官軍陣羽織(複製)		霊山歴史館
62	錦絵 城州伏見下鳥羽合戦之図		霊山歴史館
63	錦絵 毛利嶋山官軍大勝利之図(上)		霊山歴史館
64	錦絵 毛利嶋山官軍大勝利之図(下)		霊山歴史館

平成26年4月現在、下記一覧表の通り14巖、17刻字印が確認されていますが、その様相はあらたな展開を見せるようになります。

これまでには都合8回、150名からの参加に及ぶ見学の集いを実施していましたが、今般3月16日の事です。城郭談話会を中心として各地（六甲、伊豆、韓国倭城、大坂、他）で研究されている、森岡秀人、藤川裕作、黒田慶一、三瓶祐司、平川大輔、堀口健武、青地一郎各氏からの要請により、若手研究家も交え26人を案内して「大塚の杜」山の全山を踏査した上での展開です。これまでの刻字印は角立ち「四つ目」の若狭京極藩と、「一に〇」を藩紋とする毛利藩（安芸）と、その家中（四組相当）組とされる「二」組が、「一に〇」横二の印を入れた三刻字が知られていました。したがって14刻印巖確認時点ではおせき溪筋を挟み、南が京極藩、北が毛利藩との石伐り場での両藩の棲み分けが成立していたとみられていました。

あらたな展開とは、15の刻印が発見され下表の11「平四つ目」の存在ですが、今回の3/16の案内で、江戸城での石伐り場（安山岩系）の伊豆半島東側（神奈川県）を、主に調査研究を成されている三瓶さんが確認されました事です。同じ巖には既に（2013/12/31）18～19cmの「一に〇」を確認していますが、その同じ巖の右下手からの発見となり、と同時にその説明が終了した時点で160cm離れた巖の「平四つ目」もあらたに発見しました。明くる日にその拓本を採りに行き、2個目の「平四つ目」左上に「一に〇」を見出し、左右の磐に相対して同じコンビで刻字されている事になります。

その場で「平四つ目」を森岡氏は越前松平藩の刻字印ではないかとされていましたが、その後のメールでも確認していますが、六甲の石伐り場では共有刻字印の例は11例があり、大塚の例と同じ「平四つ目」と「一に〇」の共有刻字印が3例存在しているとの事です。同じく三瓶氏からは私のフィールドでは2例あるとの事です。ちなみにおせき溪筋南側での「角立ち四つ目」4個が一辺12cm（四寸）で統一されていますが、あらたに出た「平四つ目」の二個は、一辺が14～15cmとなり測定の誤差を考慮して五寸と考えています。

これらの現象は何をものがたっているのかは今後の課題ですが、刻字印以外にも矢穴に関わって重要な指摘がありました。石材を割る為であろう矢穴について、今回現場で指摘されたのは下表2の通称「牛巖（角立ち四つ目）刻印」から、下手の溪筋に残る小石（巖と表現するより小型）に開けられている矢穴2穴ですが、矢穴位置のピッチが広く開口部の斜度が緩やかな様をして、大塚の現場で観察されての所感ですが文禄（1592～95）頃の伐り出しを想定され、本日の巡回をした中で一番古いと断言された。そこから秀吉の大坂城への直接に石垣搬入も考えられるとされたが、それについては異論もありましたが、『甫庵太閤記』の記述にも見合う様なやりとりでした。この辺は石材の残りがほとんど無く、これまで全てが持ち出されたと理解していただけない、あらたな視点が出て来たようです。

中世から近世の節目ともいふべき伏見城と関連する石垣石伐り出し地であるから意義深く、大塚の地は伏見城から6kmの程の処にあり、あらたな発見が望まれるとの感想を戴いています。

ちなみに越前松平藩とは、下総の結城秀康（秀は秀吉、康は家康からので合成名で家康の次男で三男が秀忠で徳川二代将軍となる）が、徳川幕府樹立後に松平に復姓し、柴田勝家の北の庄（福井）を継ぐ形となるが、二代目で廃嫡やお家騒動を経るが三代目で敦賀郡が若狭京極藩に編入された経過がありまして、石垣や石材に関わっては越前松平藩と若狭京極藩が隣藩との因縁が出てきます。

以上 これまでの経過報告です。武内

山科区大塚 「行者の杜」山、大名刻印磐一覧表

調査担当 久保孝・武内良一

	地 区	刻字印銘	寸法 (a・b)	石材・刻印面	巖の寸法、他	特記	地図と番号
1	A 地区	角立ち「四つ目」	一辺 12cm	ディサイト流紋岩	横 2,4m 高 1 m	昭和 5 3 年 の発見	①
2	同上	角立ち「四つ目」	一辺 12cm	石英斑岩、自然面	2,8m×3,2m		②
3	B 地区	「一に○」	a32cm/b32cm	石英斑岩、自然面	4,5m×3,0 m	同巖で二刻 字あり	③
		「一に○」横二	a27cm/b34cm	石英斑岩、自然面	「二」は 15cm 幅		④
4	同上	「一に○」横二	a25cm/b28cm	石英斑岩、自然面	3m×3,5m	二は 8cm 幅	⑤
5	C 地区	「一に○」	a35cm/b32cm	石英斑岩、自然面	2,4m×1,7m		⑥
6	同上	「一に○」	a37cm/b48cm	石英斑岩、調整面	2,2m×1,7m		⑦
7	同上	「一に○」	a31cm/b48cm	石英斑岩、自然面	1,7m×4m		⑧
8	D 地区	角立ち「四つ目」	一辺 12cm	石英斑岩、自然面	0,6m×2 m	13/12/04	⑨
9	同上	角立ち「四つ目」	一辺 12cm	石英斑岩、自然面	0,8m×4 m	13/12/23	⑩
10	E 地区	「一に○」	a23cm/b25cm	石英斑岩、自然面		13/12/31	⑪
11	同上	平「四つ目」	一辺 16cm	石英斑岩、調整面	同巖で別々発見	14/03/16	⑬
		「一に○」	a18cm/b19cm			13/12/31	⑭
12	同上	平「四つ目」	一辺 15cm	石英斑岩、自然面	同巖で別々発見	14/03/16	⑮
		「一に○」	a20cm/b18cm			14/03/17	⑯
13	同上	「一に○」横二	a21cm/b15cm	石英斑岩、調整面	「二」は 8cm 幅	14/02/21	⑫
14	同上	「一に○」	a42cm/b43cm	石英斑岩、調整面		14/02/22	⑬

- ※ aは「一」の長さ、bは「○」の径
- ※ 刻字巖は14巖で、刻字異種が同じ面に共有するのが2巖、面をたがえて1巖が存在していて、大名藩印は17刻字となっています。
- ※ 拓本は全て採拓と保存をしています。
- ※ 1の石材（質）については輝緑凝灰岩とも言われているが、後の全ては石英斑岩とされる花崗岩系の石材である。
- ※ 1, 2の角立ち「四つ目」が昭和52年～54年での発見であるが、後の15例の刻字巖は平成24年以降の極めて近年での発見である。

(2014/3/23 現在)